沖縄における伝統的住居の形態と集合に 関する調査研究(2)

 武者
 英二
 山田
 水城

 永瀬
 克己
 古川
 修文

 崔
 康勲
 浅川
 安生

 高橋
 正博
 白井
 達雄

 大塚
 信哉

目 次

はじめに

- 第1章 研究の目的と方法
 - 1-1 研究の目的
 - 1-2 研究の方法
- 第2章 屋敷内に装置された生活空間構成要素
 - 2-1 主屋の地域特性
 - 2-2 敷地形態と家屋配置
 - a. 敷地の形状, 広さ
- b. 配置の方法
- 2-3 屋敷囲いの重要性
 - a. 囲いの形式 b. 囲いの材料
- 2-4 門, 入口の意味
 - a. 門の位置・方位
- b. 門の断面
- 2-5 屋敷のシンボル的存在-ヒンプン
 - a. ヒンプンとは b. 機能 c. 材料
 - or City of City
- 2-6 見い出せなかったアサギ
- 2-7 井戸の変遷
- 2-8 納屋・畜舎の構造
- 2-9 フールの遺構
 - a. フールとは b. 屋敷内での位置
 - c. 形態 d. 材料
- 2-10 残存していた高倉
- 2-11 庭と構成要素の相互関係

第3章 集落構造の分析

- 3-1 屋号からみた親族分布
- 3-2 敷地割りと道構成
- 3-3 集落景観の手法と特徴
- 3-4 祭祀の空間
- 3-5 道の持っている空間性

第4章 防風林の形態と風環境

- 4-1 平良家,山川家の屋敷林の形態
- 4-2 屋敷囲い内部の風環境
- 4-3 夏期の生活風の分布(山城家、仲原家の場合)

第5章 方法論をめぐる諸問題

- 5-1 民家・風環境の両班と集落班
- 5-2 集積図の解析にか、わる基本的観点
- 5-3 神観念と集落がきり結ぶ「空間」

あとがき

はじめに

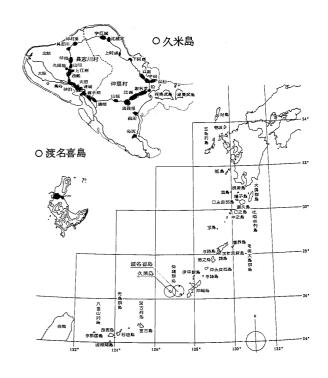
法政大学では沖縄文化研究所を中心に、昭和54年度から3年間にわたり沖縄の離島・久米島の総合的な学術調査を行った。本研究はそれらの諸研究をもとに、昭和57年度から2年間の新住宅普及会の助成を受けて現地調査を行った概要である。

1 研究の目的と方法

1-1 研究の目的

本研究は、沖縄地方の伝統的住居と集落を対象に実証的な研究を行い、それら住居の形態と集合の方法についての特性を、明らかにすることを目的としている。

沖縄県は沖縄本島を東端にして、西南端の与那国までのお、よそ600kmの間に73の島が散在している。これらの地域に見られる南島系住居は、この範囲に限らず、南西諸島全域から黒潮沿いの四国南岸・志摩半島・浜名湖豊川流域・八丈島・房総半島の2,000kmの間に線状に分布している。この広さは、北海道から九州にいたる距離に匹適する。幸なことに黒潮沿いの離島には、これらの伝統的な住居が若干ながら残存している。



そこで本研究は、こうした広範囲に分布している伝統的な南島系住居のうちで、最も残存率の高い久米島と渡名喜島に焦点を絞り、昭和57年から59年にかけて実地踏査を行った。「沖縄における伝統的住居の形態と集合に関する研究 その1」では、もっぱら久米島を中心とした民家の悉皆調査と風環境の計測結果を報告した。その後、伝統的住居の保存状態が良いと伝えられている離島の予備調査を行い、その範囲は北から八丈、コシキ、奄美、沖縄本島北部、伊平屋、慶良間、渡名喜、久米、宮古、石垣、竹富、波照間、与那国の諸島に及んだ。これらの島に見られる民家と集落には、共通性を有しながら異なった独自性のあることがわかってきた。今年度の研究では、これらの成果をもとにして久米島に隣接し、しかも敷地形状や平面形の違いの大きい渡名喜島の民家と集落の比較考察をしようとするものである。

1-2 研究の方法

性格の異った調査を能率よく進めるために、民家・集落・風環境の3班に分かれ、基礎的な資料の蒐集を行った。集められた資料は総合的な見地から、さまざまな検討が加えられ、民家・集落構成ならびに神観念との相互関係の分析と組立ての作業を行った。基礎資料としては、民家の戸籍簿・実測図・集落要素構成図・風の年間計測表などであるが、これらは地域特性の検出と伝統的な住居の形態と集合の方法を解明する有効な資料となり得ると思われる。

第2章 屋敷内に装置化された生活空間構成要素

この章では、民家とその環境について、比較的細部に 亘って悉皆調査を行なうことができた久米島と渡名喜島 を中心にして、比較の糸を手繰ってみる。

久米島民家の標準的配置,主屋関係については,前報 10号で記したが,南島系住居では,配置構成上重要な相 関関係をもちながら敷地内に分散する家屋とそれに付属 する施設,つまりそれら生活空間構成要素をぬきにして 考えられない。それらは,どのようなものか。いかなる 意味をもつのかを本号で補遺,概説する。

2-1 主屋の地域特性

主屋については、第10号で述べたように、タイプは大きく3つに分かれ、分棟型、一棟型、かけ造り型に分けられる。久米島調査では、これらのいずれの型も残存していることが判明した。この残存しているものから型の違いを考察すると、そこに形態変化の歴史を読みとることができる。規模の小さな穴屋一棟から、穴屋分棟→貫木屋分棟→掛け造り→寄せ棟。それに近代的素材のコンクリートブロック造、RC 造へと移行する過程である。古い形態の穴屋は、そこには存在しないが、それ以外の型

は、大きな島であり、多くの字のある久米島の場合、このような図式的経年変化はおこらず、混在し併存している。信仰、経済上、機能上の利便性などの考え方の違いによるものであろう。

渡名喜島のように一島一村220軒余りの小さな集落では、そのような混在は見られず、そのほとんどが寄せ棟であり、掛け造り、分棟がわずかながら混じる。

久米島と渡名喜島の主屋を比較し、大きく異なるのは 間取りにおける炊事屋の形態と裏庭のとり方、広さである

久米島では、炊事屋の北壁面が一、二番座の北壁面と 面一となり、南側に空地をつくるのに対して、渡名喜島 では、炊事屋が南側に寄り、北側に建物が欠けたように 空地をつくっている。これは、敷地にゆとりのある久米 島では、附属屋に影響されず、使い勝手の良い南西角に 作業庭がとれるのに対して、渡名喜島のように、敷地を 堀り下げ、周囲に土留めを残さねばならないために、敷 地境界よりさらに内側に狭くなって、日常生活地盤面を とらなければならない。そのためにフールと主屋のぶつ かる北東隅を空けたという機能的理由と、聞き取りによ るものであるが、身分的なものから整形ができないとい う制度的理由が重なったものと推察する。渡名喜島の裏 座が狭く通路的であり、開口部が小さく腰付になってい るという久米島と異なる特質は、この敷地条件による理 由が大であろう。

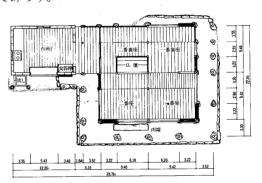


図2-1 久米島民家 平面図 家屋番号 MJ-0370

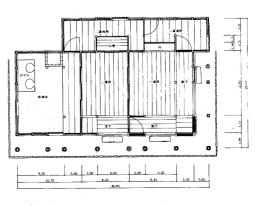


図2-2 渡名喜島民家 平面図 屋号バンシュヌハタ

2-2 敷地形態と家屋配置

a. 敷地の形状、広さ 敷地は、社会的制約、地形的条件によって異なるが、沖縄地方において、その形状は長方形がほとんどである。広さは、地域によって異なり、小は、 $60\sim70$ 坪であり、久米島のように普通の屋敷でも $150\sim250$ 坪、大きいのは300坪のところもある。(表 2-1)

敷地形状で特徴的なのが渡名喜島である。耐風などの 方策として敷地を周辺地盤面から $1\sim2$ mも堀り下げて いる。それも近年、RC 造に家を建て替えることによって 必要度が減少し、上り下りが不便であるという理由から か、埋めたてられ平担地になりつつある。このような形 状(表 2-2) は、沖縄本島の備瀬にも見られるが、堀り 下げの度合いは小さい。

b. 配置 第10号で敷地内施設の標準的配置を載せているが、屋敷内生活空間構成要素を語る際の配置図例として、こゝにもキープランを載せる。(図2-3,位置関係図)

77 IN IN	姜 马 喜 哥 一	糸満町	玉城村	中城村一	北中城村	勝連村一	石川市一	名護町	久志村一	大宜味村	村	国頭村 八七	栗国島一	久米島一	伊是名島	多良間島一	与那国島	石垣島	八重山黒島	竹富島一	1
1_	110~1五0平	二〇~一五〇坪	八〇~一〇〇坪	00~1-10坪	八〇~一〇〇坪	五〇~二〇〇坪	00~ 六0坪	八〇~一五〇坪	四〇~一五〇坪	七〇坪	六〇~ 七〇坪	七〇坪(与那)	110~1三0坪	五〇~二五〇坪	八〇坪	五〇~一八〇坪	六0~100坪	九〇坪(伊原間)	00~1:10坪	五〇~一三〇坪	音がの歴史
	100平	100坪				三〇〇坪						一二〇坪(与那)		三〇〇坪			-100坪				几日月

表 2 - 1 地域別屋敷面積

鶴藤鹿忠『琉球地方の民家』明玄書房, 1972年より作成

表 2 - 2 敷地の形態 (渡名喜島)

凡例	木造	民家				
矢印は住居の正面を示す		東	西	南	合計	%
A B	調軒 遊数	29	66	.62	157	100.0
	A	16	26	15	57	36.3
	В	2	9	6	17	10.8
c v	Н	1	2	9	12	7.7
	.G	1	5	5	11	7.0
	D	0	4	6	10	6.4
E F	J	9	20	21	50	31.8
	R C	造民家				
G H		東	西	南	合計	%
G H	遊数	26	29	27	82	100.0
	I	6	14	7	27	32.9
	A	4	3	4	11	13.4
	E	1	1	5	7	8.6
< ◆ → その他	С	3	1	0	4	4.9
	F	0	1	3	4	4.9
調査年月 '83.8~9月	J	12	9	8	29	35.3

2-3 屋敷囲いの重要性

a. **囲いの形式** 沖縄では、台風の経路や季節風によって、風向が著しく変化するために、屋敷の四方を大きく 囲うことは、合理的な形態であり、欠くべからざる要件 であったことは、次の調査結果からもわかる。

久米島では、屋敷の四方が囲われているもの61%であり、三方が囲われているものは、23%である。ほとんど囲われた感じに見えるこの二つの形式を合わせると84%にもなる(表 2-3)。渡名喜島では、四方囲い79%、三方囲い16%、合わせると95%となり、ほとんどの家が囲われていることがわかる(表 2-4)。さらに囲いの観測、実験による詳細は、第 4章で述べる。

b. 囲いの材料 久米島でもフクギの囲いは、防風、防 火の役割を担い、また夏の暑い日射しを遮る影により、 仕事の場や憩いの場を、室外につくり出している。古く から囲いの主要材の一つとして使われてきた福木は、現 在に至って、他材料と複合しているものを含めても22% しかみられない。これらの伝統的屋敷囲いの現状は、総 計でも48%であり、残りの52%が、コンクリートブロッ ク、その他の加工品による囲いに変っている。

渡名喜島を見ると、石材はわずか 5 %程で、そのほとんどはコンクリートブロックと福木の併用74%に変っている。これは、珊瑚石灰岩積みの囲いがハブの巣になるという理由と、失業対策事業のためにということから近年、ブロック積みに変えてしまったことによる。欠くべからざる要件であり、美しかった伝統的屋敷囲いは、渡名喜島のような理由や、住宅の近代化とともに減少し続けており、集落景観そのものが大きく変容しつつあることがわかる。

表 2 - 3 囲いの形態(久米島)表 2 - 4 囲いの形態(渡名喜島)

3 平面図	2	立
	軒 数	%
1+2+3+4	1,220	60.6
0 1+2+3	83	4.1
0 1+2+4	153	7.6
0 1+3+4	179	8.9
O 2+3+4	56	2.8
0 1+2	35	1.7
5 1+3	7	0.3
0 1+4	88	4.1
O 2+3	19	1.0
O 2+4	8	0.4
O 3+4	47	2.3
<u> </u>	20	1.0
O 2	10	0.5
○ 3	15	0.7
0 4	36	1.8
四方ナシ	38	1.9
合 計	2,014	100.0

3 平面以	2	
	軒数	%
1+2+3+4	188	78.7
1+2+3	4	1.7
0 1+2+4	6	2.5
O 1+3+4	22	9.2
0 2+3+4	5	2.1
O 1+2	1	0.4
1+3	1	0.4
0 1+4	1	0.4
0 2+3	1	0.4
O 2+4	0	0.0
O 3+4	6	2.5
<u>0</u> 1	0	0.0
O 2	0	0.0
○ 3	. 1	0.4
0 4	1	0.4
四方ナシ	2	0.9
合 計	239	100.0

2-4 門, 入口の意味

a. 門の位置・方位 門の位置は、敷地の正面性と深くかかわり、南入りが一般的であるので南道路を通すことのできる地形では、必ず南入口となる。敷地に対する門の位置は、主屋の仏壇と深くかゝわり、南側の中央辺りにとられる。南に道路がとれない場合、次の序列は東の南寄りにとられる。門の位置の序列は、久米島、渡名喜島とも同様である。

b. 門口の断面 道路から屋敷への進入は、一般的に平 坦で入るか、一段上るかであるが、階段でおりる渡名喜 島の場合、宗教的理由からどんなに深さがあっても奇数 段で下りきるのが良いとされ、地盤が深い場合は、ステッ プを一段づつ勾配をとりスロープ化し、蹴上げ寸法を小 さくする工夫をとっている(図 2 - 3)

2-5 屋敷のシンボル的存在ヒンプン

a. ヒンプンとは ヒンプンは、屋敷正面の門と主屋との間にたつ屛風状の塀である。その呼称は、中国語の屛風(ピンフン)に由来している。地域や家によって様々な材料や空間処理の方法が見られる。(図 2 - 4)

b. 機能 1) 外部からの視線を遮ぎり、住居内部のプライバシーを保護する。2) 台風時の防風効果。3) 材料、大きさにより家の格式をあらわす。4) 悪魔返し。

5) 屋敷出入口を表わすサインであり、来訪者の心の準備の場としての効果などがあげられる。

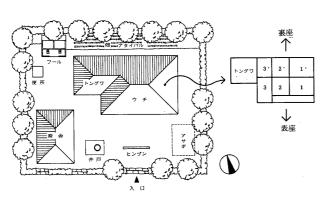


図2-3 沖縄の一般的屋敷配置

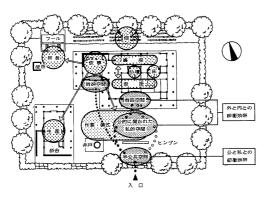


図2-4 機能概念図

c. 材料 珊瑚石灰岩の切石, 竹垣, ブッソウゲ, 琉球 竹などの植物類, コンクリートブロックなど様々な材料が使われ, 地域によってかなり差がある。

2-6 見出せなかったアサギ

沖縄本島の中村家に見られるような主屋から離れた別棟の座敷であり、久米島、渡名喜島とも確認できなかった。

2-7 井戸

沖縄地方は、地形・地質上の制約から、大きな河川がなく、貯水適地に乏しいところである。そのため、水資源は河川表流水の井堰による取水と、地下水による取水の開発によって確保してきた。特に井戸や湧水は、当初日常生活水と祭祀専用水に用途分類され、共同井戸として使われてきた。河川のない渡名喜島では、生活水を天水に頼り水槽に貯留するか、共同井戸に頼っていた。堀削技術の開発によって大正12~13年頃から個人井戸(図2-5)が急速に普及し始めた。現在は、動力ポンプを利用している。



図2-3 門の断面図 (渡名喜島)

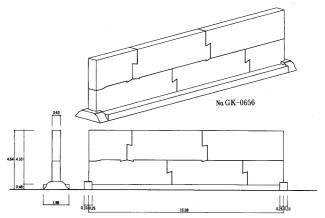


図2-4 ヒンプン(久米島)立面図

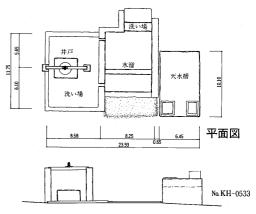
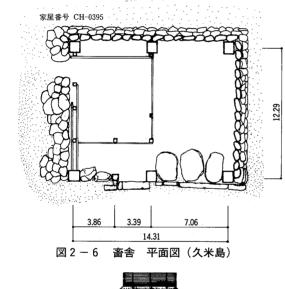


図2-5 井戸(久米島)立面図

2-8 納屋・畜舎の構造

農家のほとんどが、かつて家畜(牛・馬・山羊)を飼っており、そのための畜舎と、農機具、雑具、燃料などを収納するための納屋をもっていた。畜舎と納屋は別棟の場合と、一棟に納める場合がある。その構造は、珊瑚石灰岩を積んで壁をつくり、その上に木造小屋組をのせ、茅や瓦で屋根を葺いたものと、壁も屋根も木造のものに大別されるが、現存するものでは、前者に古いものが多い。また古いと思われるもので、珊瑚石灰岩や玄武岩の石柱を堀立にし、柱の間に自然石を野積みして壁をつくり、叉首の屋根に茅を葺いたものなどは、古代住居を思わせるものがある。(図 $2-6\sim8$)この例では叉首構造になっていない。

このような畜舎も農業の近代化にともなって消滅しつ つある。





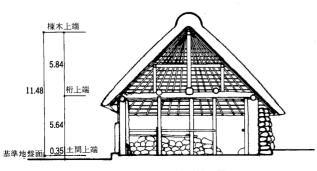


図2-8 畜舎 断面図

2-9 フールの遺構

a. フールとは 豚の飼育小屋を兼ねた便所で、沖縄独特の民家施設である。中国より伝来したといわれている。 大正 $5\sim6$ 年頃、衛生上問題があるとして、使用と新設が禁止された。

その遺構は、久米島54戸、渡名喜島では約3割の71戸 がフールを残している。

b.位置 敷地の北西隅に設けられるのが一般的である。 久米島では、それが約7割。当然のこととして主屋の構 えが逆になると、フールもそれに合わせて逆の北東側に くる。渡名喜島の場合も同様である。

c. 形 豚舎とその前面の厠部分から成る。(図 2-9~12)

d. 材料 珊瑚石灰岩が多く,新しいのは RC 造かコンクリートブロック造である。

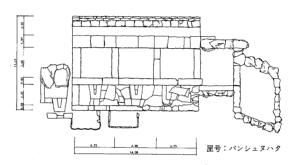


図2-9 フール 平面図 (渡名喜島)

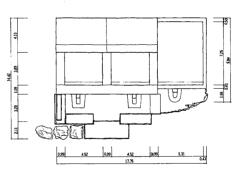


図 2 -10 フール 平面図 (久米島) No. HJ-1996

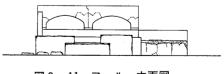


図2-11 フール 立面図

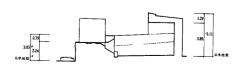


図2-12 フール 断面図

2-10 残存していた高倉

湿気を防ぎ、鼠害から穀物を守るための工夫である。 久米島に現存する高倉は、上江洲家、当間家(図2-13~15)、平良家の三棟が確認できた。

2-11 庭と構成要素の相互関係

ヒンプンと主屋の間の前庭,東側の東庭,北側の菜園 アタイバルなど,門と仏壇の宗教的意味,ヒンプンとの 関係など,構成要素間の相互関係は,本論で詳述する。

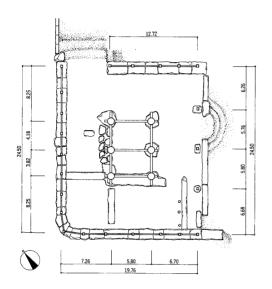


図2-13 当間家高倉(久米島)平面図

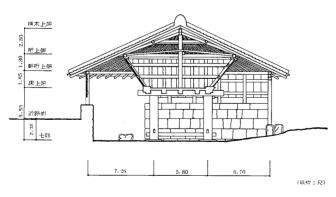


図2-14 当間家高倉(久米島)断面図

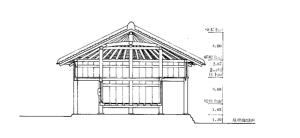


図2-15 宇江洲家高倉(久米島)断面図

第3章 集落構造の分析

前回の報告では集落踏査の目的、対象の選定、解析法の概要、仲地・山里集落における調査のデータバンク的な集落構成要素集積図等で集落構成の背景を示した。集積図は、住居集合の形態、屋根形態、囲いや植栽の状況、御嶽、拝所、井泉の位置などの集落構成の要素に加えて聞き取り等によって得られた情報をできるだけ1枚のベースマップ上に記入したものである。本稿では当該集落において、さらに1)屋号からみた親族分布、2)敷地割りと道構成、3)集落景観の手法と特徴、4)祭祀の場、5)道空間の各項目に分け、その概要を述べる。なお、儀間・嘉手苅、島尻集落及び渡名喜島についても同様な分析を行っているが梗概の紙面上、解析の方法を述べることにと、めたい。

1)屋号からみた親族分布

仲地・山里集落の親族関係については、『父系をたどり、これは「太史氏」「美済氏」「和州氏」などのウジとして認識されている。太史氏は仲地のアガリトゥンチを宗家とし名乗りに「昌」の文字をあてる。美済氏は西銘の石垣トウンチを宗家とし名乗りに「智」の文字をあてる。和州氏は山里の山里トウンチを宗家とし名乗りに「景」の文字をあてるとされる*』。これを現在の各家の世帯主についてみると図3-2のような分布状態となる。「太史

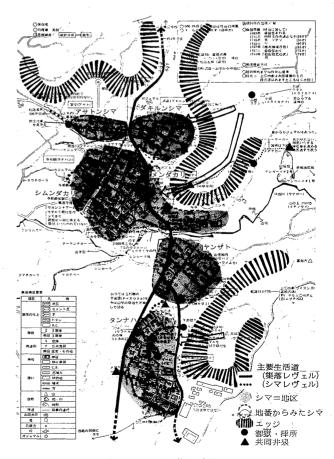


図3-1 集落模式図

氏」の集団は、宗家アガリトゥンチを中心に、仲地のほぼ全域にわたり分布し、山里にもその分布が拡がっている。「美済氏」の集団は、山里の南部地域に4世帯存在するのがわかる。これは「美済氏」の宗家である石垣トゥンチ(上江洲家)が西銘集落にあることから西銘に近い、山里の南部地域に分布していることを示し、また、『仲地・山里集落は西銘集落との間に、若干の通婚関係がある*』ことを読みとることも可能である。「和州氏」の集団は、宗家である山里トゥンチの周辺のみに分布していることを示している。

また、各家が姓のほかに屋号をもち、分家する場合は本家と関係ない新たな名を付ける場合もあるが、一般には分家して出た方位や位置を表わす標示語を本家の屋号に付け加えることによって本家と分家を区別している。具体的には、アガリ(東)、イリ(西)、メー(前)、ウィ(上)、クシ(後)、グヮー(小)等である。聞取りによると、御嶽を背後にして南西に集落が拡がるといわれている。集落の草分け筋のなかで創始者の家筋とされる根所(または根屋)が御嶽に最も近く、御嶽の入口に屋敷を構えた。根所は村落創設の伝承、村落祭祀の機能分担の点からも村落の空間的配置上、ほかの家々より上位にあるのがふつうである。根所以外の家々は御嶽を背にして、根所の前方に出て根所よりも御嶽に近く位置することは許されないという宗教的信仰に規定づけられた法則があ

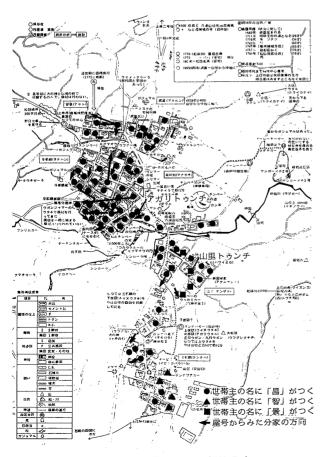


図3-2 屋号からみた親族分布

る。御嶽の南西に拡がる集落では、分家の標示語のうち 方位を表わすものとして東・西・前等が多く用いられる。 この集落における屋号からみた分家は図-2である。図 で示す矢印の向きは南を中心に南西方向を指している。 このように、屋号は本家筋、序列、分家した方位を示し、 集落の発展拡大を見るうえでの主要な要素のひとつとい える。

2) 敷地割りと道構成

仲地・山里は、小岳、大城頂の裾野の南西に下る段丘地に形成された集落である。敷地の地割と道の関係は、山里が塊状型、仲地が塊状、井然型の混在併存型である。

山里が塊状型, 仲地が塊状, 井然型の混在併存型である。 塊状型は, 道路網, 或いは屋敷の配列にも規格性のない 形態で, 原初的な地形対応型といえる。

当集落の道の形態は、塊状型といっても平地であれば 当然、格子状のように条里的になるのであるが、勾配地 や変化の多い地形なので原則的に格子状的な道路を地形 に合わせて設けたものである。6~10戸位の単位で大き なループ状の道をつくり、その中に小さなループを組み 込むといった方法がとられている。戸数が増えるに従い、 根のループに新しいループが付け加えられ、決して行き 止まりの道形状にはならない。ループの結節点は沖縄独 特の手法が用いられている。交叉部がT型になるよう造 られ、十型交叉部は中央軸に対して交叉する道がそれぞ れ若干ずれている。こうした街路の三叉路の突き当たり

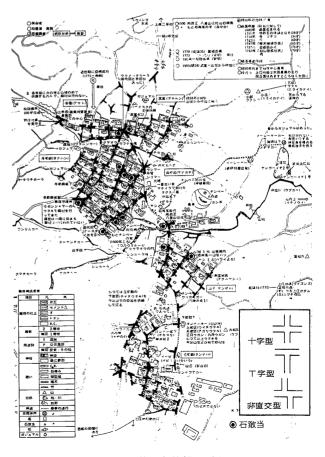


図3-3 道の交差部のパターン

や四辻の路傍等に魔除けの一種と考えられている石敢当が設けられている。石敢当の数は仲地-10, 山里-2であった。

3) 集落景観の手法と特徴

沖縄の集落のなかで、特に景観上に大きな影響を及ぼ しているものとして屋敷囲い,屋敷形状,屋根葺材料を あげることができる。この集落では松、フクギ、ガジュ マル等の高木が点として遠望できランドマークとしての 要素とサイン性をもって存在している。集落の出入口や 字の境界におけるエッジの役割を果たしている松の巨 木、旧道にみられるフクギの並木、君南風の象徴的なヤ シ等である。仲地では集落の北端, 具志川集落へ向かう 県道沿いに松並木が、安里シマのはずれの農耕地へ向か う集落西端の道沿いにも同様の松並木がある。また, 仲 地と山里の集落境界に位置する仲地橋のたもとの一本 松、山里から上江洲、西銘の両集落へと分岐する三叉路 の交点脇の一本松。このほか, 防風林としての機能のご とく生産の場を囲繞する松並木があり、松が集落の輪郭 を形作るように観察できる。フクギの並木が旧道と一致す る場合が多いのは成長の遅い樹種ゆえ当然なのかもしれ ない。そして、それが神道を兼ねていることが多いのは かつての重要な道であることを暗示させる。そのほかに、 珍しいヤシの高い姿を2ヶ所でみることができるが、い ずれも久来島最高神女である君南風に関する施設である

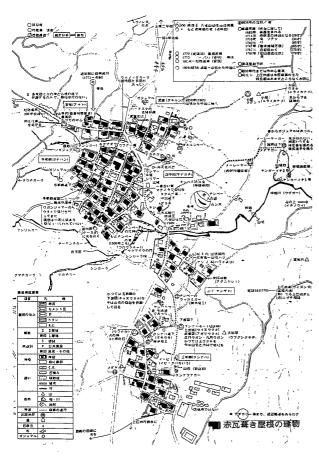


図3-4 赤瓦葺き屋根の建物

ことは興味深い事実である。

松の植林に関しては、久米島に蔡温松があったという説であるが、現在みる松は蔡温時代よりもかなり新しいものであるので真実は定かでない。しかし、その植え方には蔡温の影響が大きく働いてはいるであろう。集積図を作成していくと、集落の出入口を示すサインや集落のエッジを表わすかのごとく植栽されたとみることができる。これらの集落は、同一集落であるようにみれるが、仲地川という自然的要因によって区画され、さらに、松を植えるという人工的要因によって、その境界を一層はっきりと浮び上がらせている。

4) 祭祀の空間

沖縄にみられる神観念の神は、ニライ・カナイの神、アマミヤ・シネリアの神、オボツ・カグラの神が三つ挙げられ、それぞれ別の発生原理があるといわれている。こうした信仰のなかで集落にはいくつかの拝所が存在する。とりわけ、神を祀るところで大切にされているのが御嶽である。琉球民俗学の研究では、御嶽とよばれる聖域は集落とある一定の位置関係と方向性をもって存在していたといわれ、草分け宗家ほど御嶽に近接したところにおかれ、御嶽のある方位が儀礼的に優位とした方位観をもっている。御嶽の置かれている場所性の追求は、集落の成立がその後の発展形態や、屋敷配置を見極める際の重要な手掛りとなるはずである。仲地で左構えの家を

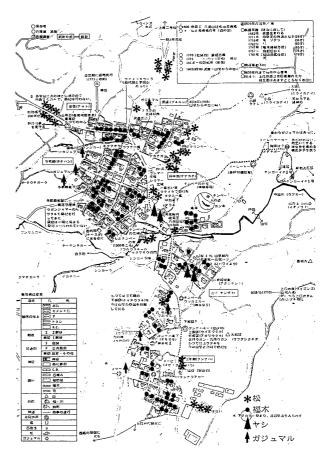


図3-5 ランドマーク(高木)

一軒見ることができるが、この家の場合、西隣に武富御嶽があり、御嶽側に不浄部分を向けない配慮から、逆構えをとっている。これは屋敷配置に信仰的要因が関わる事例である。また、御嶽が集落のどの地点にあるかという位置のほかに、神事の際、御嶽での遙拝者の向き(ここでは御嶽の向きとする)は、御嶽の神や御嶽と集落の関係をしばしば暗示しているようである。具体的に事を落では、首里を遙拝するといわれている武富御嶽は東を向いて拝むのであるが、この延長線上に首里が位置している。小嶽、大嶽の御通し御嶽であるメデヤ御嶽は現在では1ヶ所に香炉が集積されているが、かつては小嶽、大嶽、首里を遙拝するそれぞれの場所に置かれ、香炉の向きはそれらの方向を明確に示していた。与那覇御嶽は、北北東の武富御嶽を向いている。そして両御嶽を結ぶ道

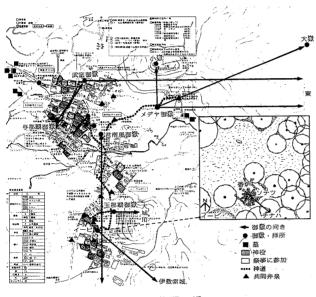


図3-6 祭祀の場

が神道と呼ばれていることを考え合せると香炉の向きは、興味ある方向を示しているといえる。(図3-6を参照)

集落には信仰の場として御嶽の他に、共同井泉のうち神井泉(拝井泉)と呼ぶものがある。干魃が続いても水が枯れることなく村民の生命を守ったまさに神の水である井泉を拝し、日常使用されることなく祭事にのみ使用される。

集落内祭祀は、点としての拝所を中心にして行われるが、線として各拝所を繋ぐ道空間でも行われ、これを神道と称している。神道は日常、他の道と区別なく使用されるが祭祀時には超越者の場と変わる。このように集落はその構成員ならば当然のことと理解している不可視のネットワークによって構成されている。

5) 道の持っている空間性

集落の空間構成をみる場合,道と建築との関係は一つの重要な視点である。集落内の道そのものについては、 集落内の街区が整備され、アスファルトの舗装化が進んでいる。確かに利便性は向上するが、旧道の石敷のような涼しさを失ったり、道路周辺の植生への影響などマイナス面も多く出ている。道路幅員の拡張によって屋敷林が切り倒され、珊瑚石灰岩の美しい塀がコンクリートブロック化し、景観を著しく損なうばかりでなく、防風林を切ったことによる台風の被害も出ている。長い時間と住民の集積効果としての景観や安全と表面的な近代化との間に大きな矛盾を起こしている。そのなかにおいて、山里集落の南端に東西に走る旧道が、かつての姿そのものを残して存在している。この道は、アスファルト化以前の状態で、よく整備された草道で、フクギ並木となっている。道の中央には大きな石が横たわり道を分断して

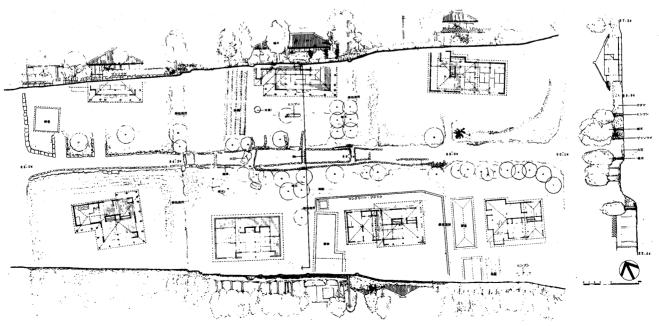


図3-7 大石の旧道

いる。この石の移動が困難なためか集落内道路の舗装化という開発の波から取り残されている。かつての当該集落はザダケの屋敷囲いとフクギのあいだから棟を低くした茅や赤瓦葺き屋根の家並みを想像することができる。大石の旧道はこうしたかつての姿を容易に想像させる道であり、屋敷と集落を結ぶプリミティブな関係がよく現われている。

道は集落の骨格をなすものであり、日常の生活領域を 連絡する役割のほか、祭礼に見られる道行きを観察して いると道そのものが精神的な世界の中心ともなりうる。 沖縄における道空間の解析は神観念と集落の空間構成を 解く糸口になりうるかもしれない。

※ 桜井徳太郎

「共同体祭祀の構造と機能―とくに祭地・祭儀と神役の継承」『沖 縄久米島』(弘文堂)所収

4. 防風林の形態と風環境(その2)

久米島における民家の空間構成と風環境との相関を求めるため、我々は昭和57年9月より翌年9月までの1年間、久米島の東西にある代表的な2軒の民家(仲原家、山城家)の庭内に風向風速計を設置して、民家に吹く風を実測し、測候所の風と比較した。その中で、当然予想されたことではあるが、僅か62km²の平坦な小島であるにもかかわらず集落の地形的条件が風性状に与える影響は大きく、更に民家の屋敷内に吹く風は屋敷囲いの形態によって大きく異なることが判明した。そこで島の東西南北4地域の風性状を求めると共に、屋敷林の形態による防風効果の相違を求めることを目的として、北の宇江

城に平良家(仲里村字宇江城803), 南の島尻に山川家(仲 里村字島尻54) を選定し, 同様の実測を行った。

本章では平良家,山川家の屋敷囲いの形態と防風効果, 及び,山城家・仲原家の生活風に対する風速分布につい て述べるものである。

4.1 平良家,山川家の屋敷林の形態

久米島は平坦な地形とはいえ、その北部には宇江城岳(309m)、タコウ山(326m)、大岳(230m)と、島の最高峰が東から西へ連なっている。この山地の北側は標高100mの段丘面まで急傾斜で落ち、そこに宇江城と比屋定の二つの集落が形成されている。そしてこれら集落の北側は更に急傾斜をなしていて、およそ700mで海岸平地に至っている。

宇江城の民家の屋敷囲いは、石垣と防風林の併存形態が多い。平良家の場合も主屋前面(南側)は石垣の上に灌木を植えた形態をとっているが、その灌木の高さは主屋 G. L より僅か1.6m にすぎない。これは防風よりも目隠しを目的としたものである。しかし、主屋の裏側(北側)は平均樹高7.6m のフクギおよびチャーギが約0.9m の間隔で密に植えられており、海(北)から吹く風に対する防備を厚くしている。

東,西,北側の樹木のうち,防風を目的とした樹高2.0 m以上の樹木を合計すると120本あり,その樹種構成はフクギ35本(29.2%),チャーギ(イヌマキ)27本(22.5%),シンマタギ15本(12.5%),その他43本(35.8%)の割合になっている。

一方、山川家の在る島尻集落は、島内一周道路に沿っ

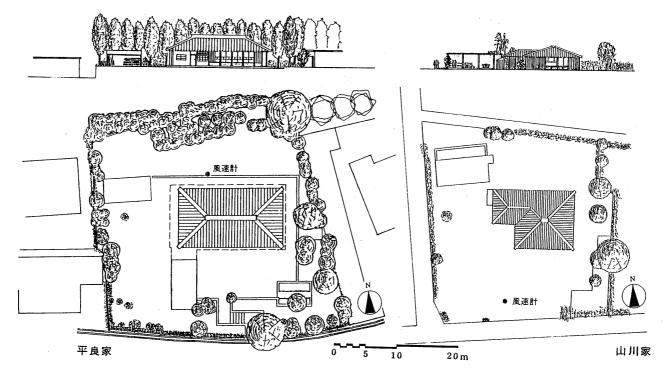


図4-1

て点在する他の集落から全く孤立して、島の南端に開かれた海岸平地に存在する集落である。すなわち、島の南部の主峰阿良岳 (287m)、中ムイ (216m)、大西山 (151m) はそれぞれ東側に三つの尾根を張り出して緩傾斜をなし、このうち中央の尾根と南側の尾根との間には小さな海岸平地が開かれていて、ここに戸数68戸の島尻部落が存在する。

島尻の民家の屋敷囲いは、石塀と樹木の混用が多いが、 屋敷囲いをほとんど持たず風に対して無防備に近い家も 少なくない。山川家の場合も敷地外周177mに、高さ3m 以上の樹木は僅か14本しかなく、しかもそれは主屋の東 (海側)と北に集中して植えられている。その部分の平均 樹高は4.55m、樹木の平均間隔は2.76mであるから、他 の集落の民家と比較しても山川家の屋敷囲いは風に対し て無防備に近いといえよう。

4.2 屋敷囲い内部の風環境(その2)

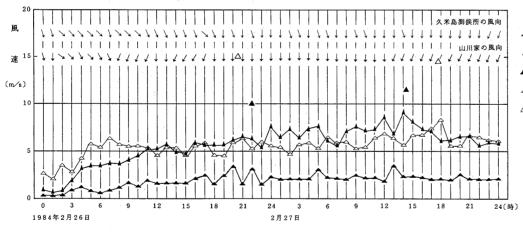
風速計の出力記録で瞬間風速の動きを見ると,風は強弱入りまじって絶え間なく吹いている様子がわかる。しかしそれを平均化してしまうと,平均風速は予想以上に小さな値になる。特に民家の屋敷内に吹く風は,地形,防風林,隣家等の影響を受けて,平均風速と瞬間風速の間には相当大きな差異が生じることになる。

環境計画の視点から風を見る場合、平均風速を対象に

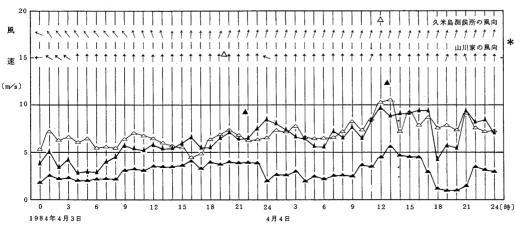
考察してよいであろうが、実際の生活や建築物との関わりの中で重要な意味を持ち、あるいは、人が生理又は心理的に関わりを持つ風となれば、10分間最大瞬間風速を見る方が妥当であろう。更にまた建物の構造や揺れなど、いわゆる強風を対象とする場合は、日最大瞬間風速あるいは月間、年間における最大瞬間風速が問題となろう。図4-2は、これら幾つかの観点から風の変化の様子を示した一例である。

民家に吹く風は、測候所の観測値に比べて相当小さくなるのは当然であるが、どの程度低減された風が吹くか、4軒の民家(仲原家、山城家、平良家、山川家)について計算してみた。山城家、平良家は空港出張所に近く、仲原家、山川家は久米島測候所に近いため、それぞれに近い測候所の平均風速を基準にして、その何%の風が吹くかを示したのが図4-3である。

最も密な屋敷林で囲まれた仲原家では、東・西・北の方位の平均風速は、久米島測候所の平均風速の3.4~10.4%の風しか吹いていない。しかし、10分間最大瞬間風速で表わすと、測候所の平均風速の12.4~35.4%の風が吹いていることがわかる。また、粗な形態の屋敷林を持つ山川家の場合、各方位の平均風速は測候所の39.0~56.9%の風になっているが、10分間最大瞬間風速では88.8~150%位の風になることがわかる。我々が得られる公式資料は測候所の平均風速または日最大瞬間風速であ



- ↓ 風向(北風の例)
- ▲ 山川家の平均風速
- ▲ 山川家の10分間最大瞬間風速
- ▲ 山川家の日最大瞬間風速
- △ 久米島測候所の平均風速
- △ 久米島測候所の日最大瞬間風速



(南風の例)

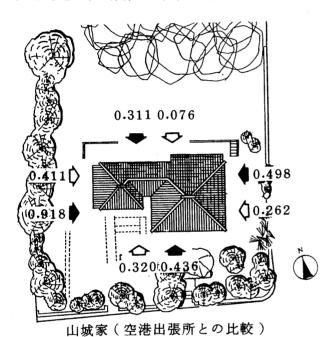
*10分間最大瞬間風速

1日24個の正刻時において、正刻の10分前(50分)から、10分間隔に区切り、各区間における最大瞬間風速を求める。即ち1時間毎に6個のデータが得られる。これの平均値を以てその正刻時における10分間最大瞬間風速とし、図に示した。

ることから、この比率から久米島の民家の風を推測する ことができよう*。

4.3 夏期の生活風の分布(山城家, 仲原家の場合)

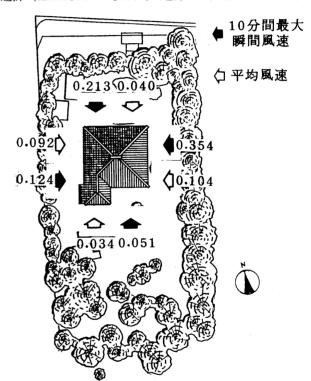
南西諸島は強風地域とはいえ、台風や冬期季節風以外は穏やかな日が多く、暴風日数はむしろ東京より少ない。(風速10m/s以上の暴風日数;久米島63日、東京75日)特に夏期は穏やかな南風が吹き、暑い日射しにもかかわらず爽やかな涼しさをもたらしている。涼風を屋敷内に取り入れることは島の人々にとって重要なことである。しかし一方、暴風から家屋を守ることを最優先しなければならないことは言うまでもなく、強風を遮り涼風を受け入れるという二律背反の条件が要求される。



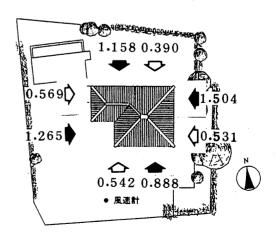
では、 の・432 の・432 の・463 の・278 の・637 平良家(空港出張所との比較)

久米島の屋敷林に多く用いられているフクギは、厚い大きな葉が幹まで密に茂る樹木である。この樹木で厚くガードすると涼風は遮られ、夏期の暑さは大変なものとなる。この解決策として島の人々はフクギの下枝を払い、地上1~3m位の風は吹き込むように工夫している。下枝を払った部分にはハイビスカス等の鑑賞用灌木を植えているが、これは外部への目隠しの作用も兼ねたものである。生活風はフクギの下枝と灌木の間を縫って吹き込む形になっている。

図 4-4 は夏期の南風に対する屋敷内各点の風速の垂直分布を示したものである。測定方法は長さ5 m のポールを立て、地上から2、3、4、5 m の高さに4 個の風速計 (KANOMAX 多点式風速計6200) を取り付けて、



仲原家(久米島測候所との比較)



山川家(久米島測候所との比較)

図4-3 測候所の平均風速に対する各民家の風速比

約20分間実測した。

仲原家の場合、地上3mにおける風が吹き込むようになっており、屋根面に当たる地上 $4\sim5$ mの風はおさえられていることがわかる。特に図4-3でも示したように、裏山から吹く南風は極端に弱くなっているにもかかわらず、P1, P2における地上3mの風は、一番座、二番座に心地よい涼味をもたらす風として、少しでも多く取り入れるよう工夫されている。

また、山城家の場合は風向南南東のときの風速分布であるが、主屋前面の屋敷林が仲原家ほど完全に剪定されていず、樹木間隔も粗であるため、上空はど強い風になっている。しかし、生活風として最も重要なP1、P2の風の分布は、座敷内に涼風を取り入れる形として理想的であろう。また、山城家の場合は東風に対しても実測を行ったが、風向南々東の場合とほぼ同様の結果が得られている。

昭和56年から4年間続いた沖縄久米島の風の実測調査によって、我々は屋敷囲い内部の風環境の一端を知り得たにすぎないが、それでも、得られた資料を整理検討す

ると、枚数の限られた梗概で触れられなかった事項も 多々ある。例えば久米島の地形と風の特徴、台風時や冬 期季節風における風環境、日最大瞬間風速についての考 察、更に温熱環境などは後日予定されている研究報告書 にて改めて報告する予定である。また、現在、風速計を 久米島から渡名喜島の民家に移して実測を行っている が、これらのデータが入手されれば、両島の風環境の比 較が可能となる。更にこれまでに得られた実測値をもと にして、模型による風洞実験も可能となろう。今後の研 究課題の1つとして、検討の価値があるのではなかろう か。

※ 日最大瞬間風速の比較については、1983年の所報で多少ふれたが、ここに、風向北と南に関して得た値を、参考資料として記載する。数値は久米島測候所の日最大瞬間風速を1として、それぞれの民家の日最大瞬間風速の比を1年間について統計処理したものである。

北風の場合 山城家0.701, 仲原家0.384, 平良家0.463, 山川家 0.648

南風の場合 山城家0.436, 仲原家0.152, 平良家0.748, 山川家 0.925

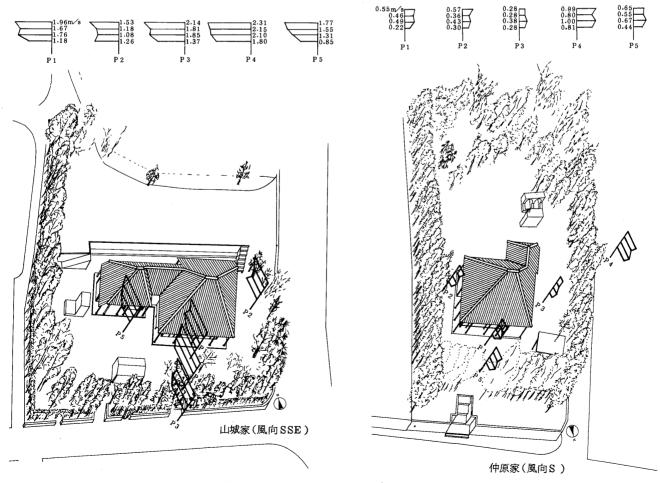


図4-4 夏期における生活風の垂直分布

第5章 方法論をめぐる諸問題

5-1 民家・風環境の両班と集落班

本調査研究の展開を踏まえ、その過程で提起された諸問題について、方法論上の観点から考察する。民家・風環境の両班についで参加した集落班は、先行する実測・文献・聞き取りなどの諸調査の示唆をえて、人々の生活を支えている何ものかの存在、すなわち環境・生活と生産・信仰の"有機的な重ね合わせ"に焦点が当てられた。かくして集落班の研究目的は、神観念と集落の空間構成における関係もしくは構造を明らかにすることが目的として設定された。しかしその蓋然性についてのリアリティにもかかわらず、それを記述すべき方法(論)上の問題は十全とはいえない。したがって、対象の研究と相互補完的に研究の方法を追究していかざるをえない。あわせて、民家・風環境の両班の成果をも包括しうる場を開くことである。

集落のフィジカルな場面を手懸りとして,こうした諸 問題を,全一的に解決されるべき可能性の探究が,方法 論として提起される。

5-2 集積図の解析に関わる基本的観点

仲地・山里集落の実地踏査を経て、民家班の現存する 木造民家の悉皆調査の記録をベースとして考案された集 落構成要素集積図は、当該集落の現象する物象および事 象を網羅している。集落という全体を、可能なかぎりあ るがままに、かついっさいを記録したいという意志が込 められている。と同時に外部からの観察者にすぎないと いう自己限定をも含んでいる。

集落構成要素集積図の解析の一端は、すでに本文に記されたとおりであるが、その際、留意すべき基本的観点として以下の5項目をあげる。

①イメージ・アビリティ:現前する集落に対し、その風景そのものとして直観的に認識し、研究過程での想像力の活性化を企ること。②近代化過程:赤瓦葺きの家屋と福木の並木など現前する集落は、明治23年の家屋建築制限令の解除を媒介する独自の近代化過程の所産であること。しかも、③基層構造:現前する集落は、古層の村を連綿として継承していること。すなわち共時的な認識として、④文化複合:古代より現在にいたる、歴史的経過の中で、内発的あるいは外来的契機が、全体を形づくる諸要素として組み込まれていること。その複合性あるいは展開の力学に着目すると、どうしても、そうした集落を可能とした⑤創造主体の問題をつねに問い続けなければならないことである。

5-3 神観念と集落がきり結ぶ「空間」

ニライ・カナイをはじめ神々は、幸福・豊饒をもたら

すとともに、災いをもたらす。来訪するとともに帰りいく、つねに両義的存在であるといわれる。沖縄における風水説ともいうべき腰当思想は、その具体化において、御嶽の位置の決定を要求する。ここにおいて、その場所性と方位性から、すでに神観念と集落の統合性が認められる。かくして得られた御嶽を核として、すぐれて行為的・時間的に身体化されたいっさいの事物が、集落を構造づける"ずれ"として展開される。

こうした身体的構造こそが、人々の環境・生産と生活・信仰を有機的に重ね合わす自己了解であるとすれば、いまなお所有され、記憶され、再生されていく、すなわち神観念と集落をきり結ぶ、本源的な「空間」を垣間見ることが可能であろう。

したがって、方法論とは、かかる「空間」の発見を、 現前する集落の只中に可能としうる認識の階梯とした い。

おわりに

本稿は研究概要という頁数の関係から、調査と研究の 範囲を述べるにとゞまってしまったが、報告書では「民 家・集落の空間構成の特質と、その構成原理」について、 建築的アプローチと同時に沖縄にみられる神観念、風水 思想の影響との関係も述べることにしたい。

今後の課題は沖縄の住居や集落が、東シナ海を囲む中国、朝鮮といった他地域とどのようなか、わりを持っているのか、そして東南アジアの住居との関係などについてグローバルな文化圏からのアプローチが必要であり、それらの地域の調査も必要と考える。その結果として今までに明らかにされてなかった沖縄の伝統的住環境の全体系が解明されるものと考える。

謝辞

本研究においては、法政大学沖縄文化研究所、沖縄県教育庁文化課ならびに商工労働部観光文化局、具志川、仲里、渡名喜の各村の教育委員会をはじめ関連機関のご協力とご支援を賜った。また、調査地域の大勢の方々に大変お世話になった。本欄を借りて心からのお礼を申し述べたい。

<研究組織>

〈1982~3年研究〉

武者 英二 法政大学教授

山田 水城 法政大学教授 工博 古川 修文 法政大学助手 工修

永瀨 克己 法政大学助手 工修 共立女子大学講師

浅川 安生 法政大学大学院生

〈1983~ 4 年研究〉

武者 英二 法政大学教授

山田 水城 法政大学教授 工博

古川 修文 法政大学助手 工修

永瀬 克己 法政大学講師 工修 共立女子大学講師

崔 康勲 法政大学助手 工修

浅川 安生 武者英二研究室所員 工修

高橋 正博 法政大学大学院生 白井 達雄 法政大学大学院生

大塚 信哉 法政大学大学院生